へ13
2929
4

門家巻
へ 13
2929
4

昭和九年
七月十八日
購求

滑稽四編の叙

滑稽四編の叙

ひとつの車の勢ひ、三編まつり、今度は四編、五編迄と整ひても落ちびれの流れて、中の雲と流れ、千里の雲と流れ、さて書籍作者の洒落戯作板元、世の識人、一笑よ、悦びの眉を開くや春の色、知れて一義チョンガチョンとたゞ

ちりや極らぐらくらんしの風流宗匠の表さらぐ上
十一人ぞ十七文字の祝詞をもちまいる亟
あらべ寿ぐこころいきけり
濤もしらしを世を
裏山の青葉
うもしさらく朝
表人色よ山と濤せて美人
しのちの松はまこと

牡丹
蘇一
ちらん
ちらん
雀
蕉庵
蕉外
義仲の師匠を
解説の解説
深らの名をふまをどりの人
ちらばもちがんえまぬ
松らう迂遠まきの顔

芭蕉庵
桃青
柳川岸の
香庭屋八藏

妙法蓮華經云
諸苦所因
貪欲為本
若滅之元所因
柳川岸の
歌妓
於花
十條の悪党
剛六

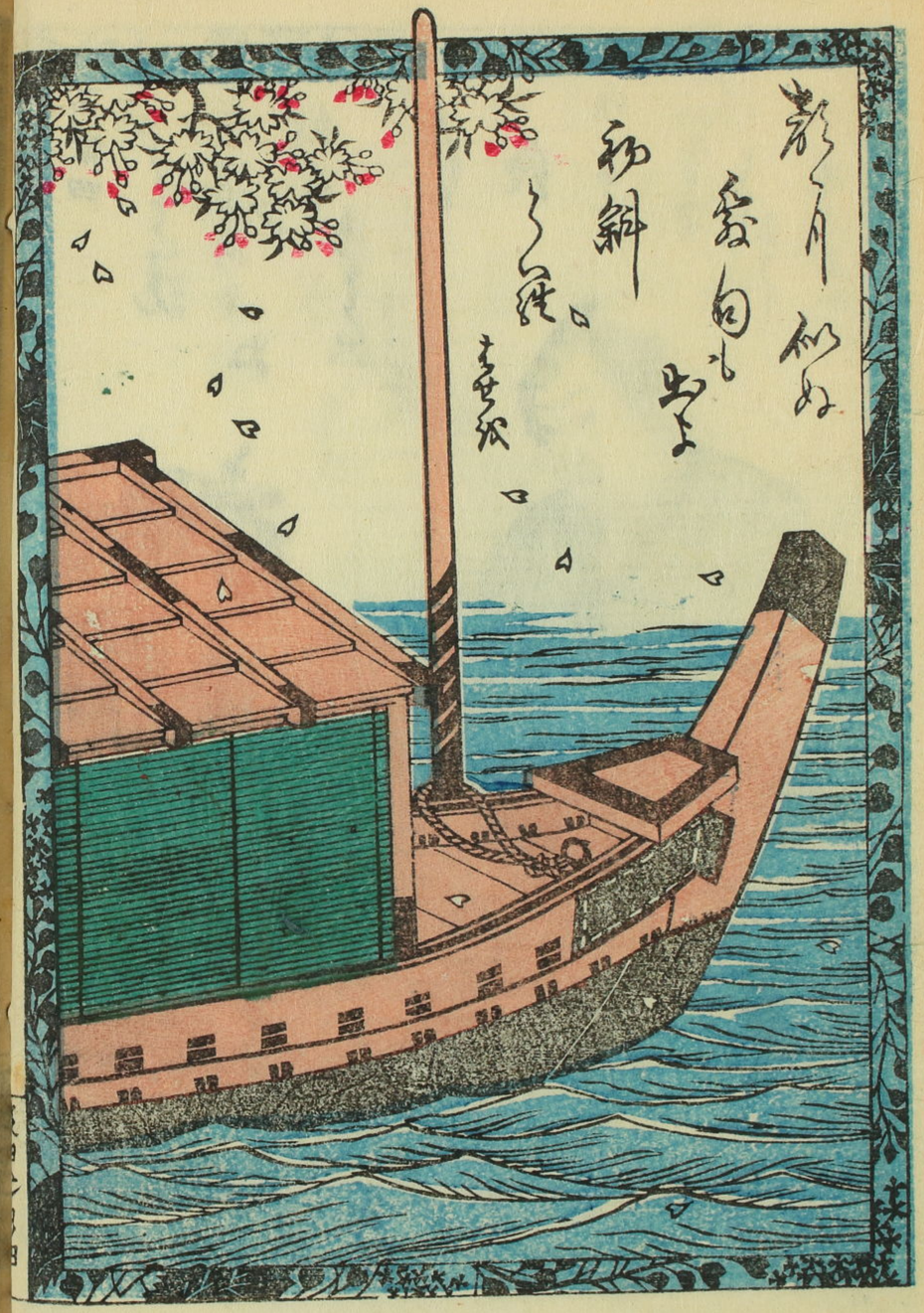
江上春風
雷春舟
長嘯歸志
滿東流
英夫畫
日南像
水貪看
赤花忘却
愁

○柳川岸の妖妓
おきつ
於光

○鄭家
さらく
馬楽

万葉四
ちはやぶる
神のあらぬ
時よ
あらしを
白の
絶
少年バ
いきを
とるなり
信人画

○浦浜の
通客
江戸屋
初五郎



春色淀迺曙第四編巻之上

東都　松亭金水編次

第一回

現世間不制在人物。爰繁昌の有さまを。今きらくふ及ぶわざよ。その等寺こい天地のごとく。揃りある中ふ。沒て張ひ冨者をつんすらふ。柳河岸道光町。ちて入来る人ふ。金銀衣裳ふ縛かぞ。折ふ稲こい一夜の間ふ。数十の金を費して。酒肉林ふ。もつの爺へ。

其を掬げば松江の鱸の膾。蜀の羹に名高しといふ新生
姜母。直眼のお前に集まるは。左慈が術を借るに及ば
ね文邦舎のありがたさ。然ばこそ爰に住居して。お前と歓待
唄妓の肉縁はあくまで綾錦。その時々の流行もの。五分でも
透ぬ打扮して。三弦把ては古昔の経正朝臣が琵琶に
も擬り唄をうたへば名に負ふ舞妓青天女も跣で逃る。其中
にもお花といふは。あの此新枝の突出しなれど。去年より芸
もよし。また節よし三拍子。揃つてらんに標致といへば。衣色に

町はあれど世のむかし。楊貴妃西施は唐人臭し。まづ今の
世に両個といへば。あの女にしやと栄華なく。なかまでする美しさ。
一個あれし人その色香に心をうばはれ。老若ゆけまで朝から晩まで
その続に。釜川沢知屋兼清などの名に聞こえたる料理屋
に招かれざるはなく。その上げくは船遊び。翌は雑揃び
芝居歌舞伎つれだち。幕引実秀引生かんべくまで年中ねんに
も。ホンニ一日楽しく。暮さらぬのは嬉しからうと思へずとうり
の閑しさ。今日申衛と沢新屋の。客を伴ひて家に帰りなば。

その主人なる書庭屋の女房八子浮気物の「ヲヤお花
お帰りなさ。夫でもあなたの外まうこと。何様もお中元の方とつて
切上げて来いなさ。晩方でもあるまあ宜敷ご。今も帰るまして
居ますヨ。サアそれ早く美物を美味くて。まア迷お休ミヨ。時に夜を
晩しなさ自い早く。さぞ第外とまらうト侯しき親ふお
美い蔓示「ハイ為ごなり侯あなた。何で私の中ふものを。
食さんなヤレコレと。裏屋貞子ふてお長ふなるとなるひまん
と嬉しい所為ふ。お根ふ強いて第外とまらいなひません。

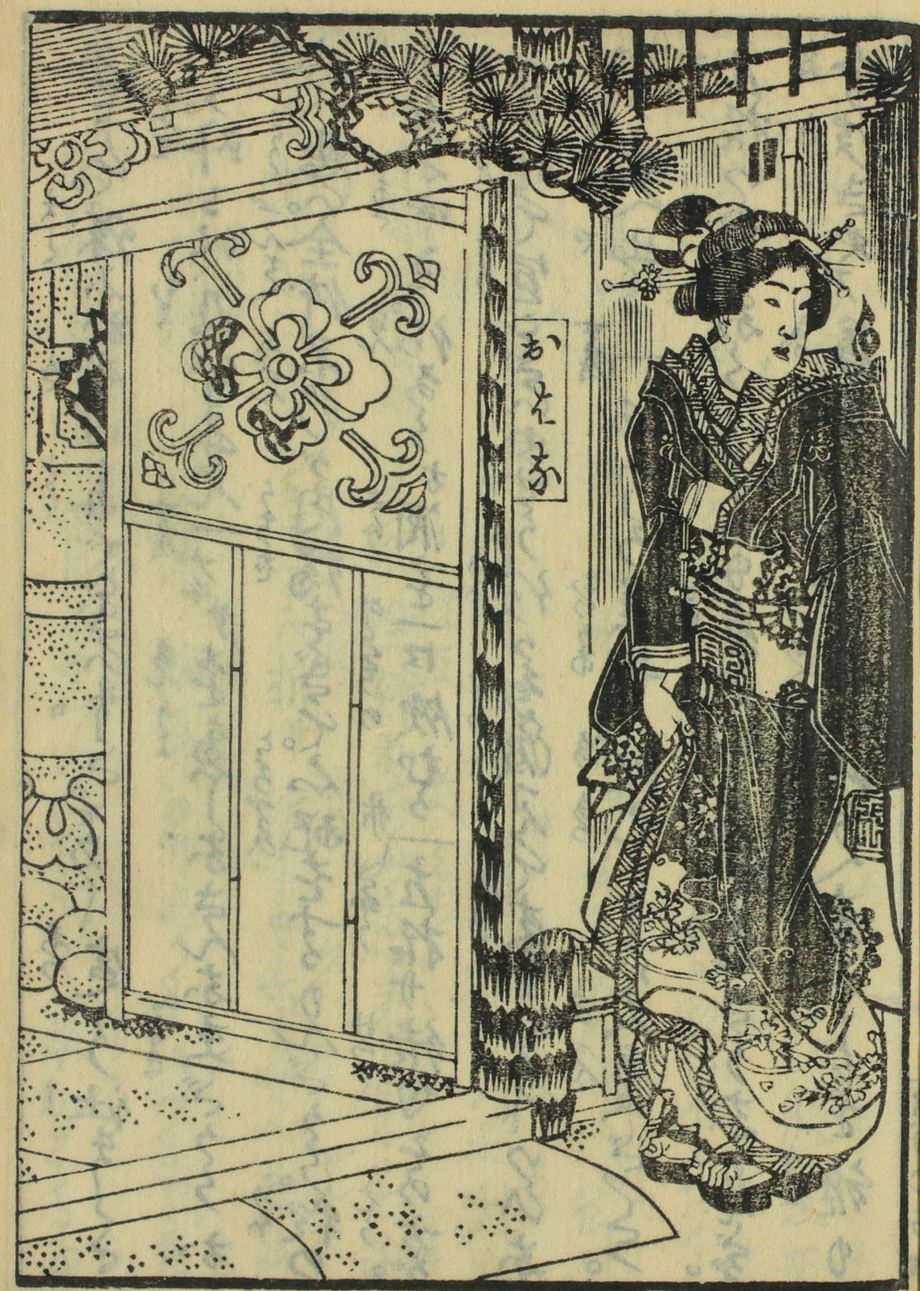
アノウ佐助ぶんまぶ為つて来ませんと「イヤ上まぶ為つて客
すまいないヨ「全体ひるなまらうこと乳に成て居ますけまど。
彼人の周ぶいのふ。元の毒ぶなるまらう隠く延ふまうこと
女房「ホヲ二お方の美物ぶ。ふらうてぶとらうて子。周ふいらうて
遠慮なしふ。ふく又辞にやまば宜うこと「働ー半へ門口
を。庵為祝と寝て帰る佐助。手拭ひ出して足袋につく。
快をそうくそうれあぶ「十二亜ふ知是中ぶ。イヤ飛ぶ
ふト吹ふふく御花ふ処へ弦出て人も急き「ヲヤ佐助

どん大きゝ四若旁。そして旅ごろもこゝ何程しこゝ。マア
今ゝ彩〻安せうト上へあがつてゞ門うと坐〻「旦那人こそ
二三日前ゝ。旅こそ元あんゝ来きつゝこと。サ。夫も宜ゞお程のこと
を。長屋の宿い一向きうぞ。世話をゝこお婆さんも。彩こそ
ごこと云ゝ。ゝ。ゝ。マア何程ゝこらうアノ通ゝ。暫彩お
娘の見。彩ゝ。ゝ時ゝ何処へゝ行て。ゝ。旅へのゝ不測ゞ
と。大屋さん指めゝひ暫〻ゝゞ。何程も逢方ゞ旅へと
云て。まゞ暫然蔡送ゝう。何うの程未ゝ彩ゝゞ引張。

涉〻ちゃア仕ようゞ。今ゝ程お程いゞゝしゝう。食ゞ傳て
呼生きうと長屋の内室さんゞ云ゝ〻ト笑てお義を
膝りのゝゝ。呆まて云蔡ゝ程あゝゝゞ。暫くあつて目
を覚ゝ。暈と倒まて気を失ゝ。女房い素より佐
助も驚き。力に任せ抱起し。耳の傍へ口を寄せ。ヲイ〻
お義さん〻〻。呼ゞ叫べと正躰ゝ。女房いゝ行ゝ薬
瓶の水。口ゝ含ゝて旅へ吹うけ。程こそまゞ息出ゝの
賀吹つけ四隣漂家の。人こゝゝ不傳集まり。奏よ藏ゝと

立強ぐ。中あい袴を端折かへ〜。医者へかけ寄る者も
あり。急角さるるあり。外先へ走る。灸の車でも少呻
つてゐるぐ〜と。眼をあきかけまばたく。おあ〜と呼ぶ
聲の耳小鹿へて月をひ〜きぬ。見朕こえまじ。安房はも〜待て
「お花気を定うしろ。何ぼ灸さんぐ〜えろうエウこえる
とるあア宜。深小さうあア物〜〜〜。震へて。渾身ぶる〜〜震へて。
コウ〜〜依助を処の引出小奇麗丸があるから丈を出してそて
熱へのお湯を一杯。とへ持て来ておくまア〜〜丈でも飲せやう。

その中ああア おい出者さるぐ。来てお呉ふさるぐらう「左様サ
ちい〜気さへ付バ。モウお医者のいつまません。何も病気らへ
ぢあア方。膳を洗〜〜りんぐ。急ぶふさう結ンでぐ〜
やて。ヤレ〜〜灸さんのお蔭で。早く気ぐ付〜〜宜つてトかの
奇麗丸方ど飲ちるに。実小来ふ病気小あ〜ぐ。気も定
う〜〜ふ〜〜る容子に人〜〜帰ゆく。女房ハ戸棚をひき
あけて。蒲団枕をさう出「マア〜〜何ふも構ぐ小一森入う
さるぐ宜ト小房風をさへ達まう〜〜「乗ぐ〜〜て お強


おたき

おまき
客に
まねかれて
桑川よ
ゆく
作者

ぐせナ。強ふお気の毒でございまして。モウ〳〵宅うち仕まして。
うち。外るに及びません「ナニサ左程あさんおさんざうお
あい悪い。全体不沙汰閉場さぎて。心配をするのんざうう。程の
ものを。不中るヨ。行のうお酒を一口飲むう「左程サ結句その方が。
気が晴て宜ございやせう。行うも渡りて来ませうトのひお
ぐう妻へ出る「行ものう差母が。死亡ございい大変ざうう。
左程いとうあう此方へも。亜ふ知らして来さうおりんぐ。
今吹きやア長屋の人も。おあが此方へ来ることを。誰も

知らず。隣へこいとるやうぐ。行程も吾体ハ不関ざヨ。彼へ差母
ハ大病で。人不由影さあいこ〳〵別が。隣のお勧さんこいう人人
が。大変気を張めてもく〳〵。影しを仕さうふりんざうう。然て
彼人も伝心ありう。行ざう知らず。彼へ左程急ふ。宅を明て
旅へ出ても。異ぢやア表いう。全体おあの此方へ来ることを。誰
ふも影しを仕あいのうエ「左程サ。誰ふも云ません。全体
差母ふ相続して。仕ふやア。滅あいのであうまんけども。差
母ハ堅い性質で。明〳〵日ふやアぐしてり。風知さるあ

ちゃアおいて。狭さんが幼のもいひまき。私も左根おりひまする。何のもかも狭さんが。新んで住んでぐらいますぐ。左根りと
こと。ふう狭さんふう。亜が知ってる長。何根きこのぐう一向と釈ぐつろうませんト史ふう彼お勧ゲ世話ゆて医者が
ゲ。備形くりと旅と。一伍一汁を後ぐくが。新せぐ女房ハ
篤ふう。喰墨て仕臭吻きこ左根ュ。外編釈の病気
で急が金ガ入るとふ。世話人ふうも喰こけまで。妻しハ
ふ知ふもいぐ。マア何ふ知ふ。おのの心気ハ感心おゆさ。

鉄ー左根ふと釈おふぐ。定めてその貴ハお茶も。彼ーふで
おらふけまど。定業とゆふハ金方ガ高ハ今ちゃふと知ふ
ずが来ても。モウ方の通ふ知ふと上ハ。お寺糸くのもるぐふ。
きこ宅へも戒名を亜て。毎日回向ーてあげまこ。釈一人見
一人できぐ義母ガ死亡ふきこ。達ふーとふふふ。早く知ふと
鉄ーふふ。仮令ぐんが来が開ガくンても。他のふふハ遠ふふ。
一月や二日ハ宅へ住ぐ。世話でもさて来ふの。体が結もあハ
ゆさトいふが義母者下の。母の心いふあふ。早意人実ハ茶と

肝せ。何卒本復させたい。思ひ出すとて祝の侍雛まで
身をも沈めしかの甲斐甲斐しく彼の人を。あること知つたら
合あへで居ようとの例を。元時雛をきいのもとに。呼ばば
いつでもかうれて。狗ホ渡来る。血の涙止めようとするその苦。
表の潜戸を戸屋敷程くあけて「チト。お形さん。条川
でござりますが。お長さんが用てきたるから。今直ちにお内でで
ざりまして。切箱お名さまのお名ざしでござる。外の枝ぢやア
いけませんト。笑て女房は立出し「アイ。仕方。左程云て

おくれと。有がたうとぎいまする。お長は今日按摩が来くつて。今
まで寝て居ましたらう。お坐敷へは出ませんと。外の者
でも宜しうア。逆来ろ。ちいさう「左程サ。何ごろ知
ませんが。是非お長さんを呼てくれろ。是ばが抵ッて居て。何
程の手紙を。書揃て。来るやうにして呉と。社仰てどざり
ます。「さうさうエそれもア。生憎ざま。然してお方のお別
深のお表さんエ「イエ。その旦那はお別深ぢやアど
ざいやせんが。彫り家の方こ来さんが。お供をして来り居さ

女房「左様ニ。ぞうぞ御ゆるしを延ハ宜しう不云て御ゝ長ハしよ
トいふを咬つけ「ナニ月宮さん参りませう。さあぢやア宜ぐい
まんなら」女房「ナニ〳〵今日ハ止めにしよう。第一ちと悪い時
ぢやア。吾儕まぢが国ならば「彼様お出あさまるあるを
を出して御長ゝ世エ。お為ぐ待て入ッ来るなら。早く往て左
様いふませうト弦出して帰るゆく

第二回

お義いふあらあらとあり。彦愛へ出べき気張ハ少けまど
素よりぞ亜一遍の心ぐりして今ハ未ん拠なきあと悪うらゐ
を。影いふ自分ことぞう。今ハ絶ぐ「ナニ後往て来
ませう。何処のお為ぐ知らるのぞ指で呼でお長ゝさるのを
往るいでゝ蒲川へ対して若くありません。その代と墨う明
後日。お寺参りをさして御長ゝ「そうぢやアお為ぐ参詣サ
仏拝せへ宜うア習の為でも。彼物を連て往ゝさへ。
寺ハ知つてるのか「左様さお寺もありまんけまど。彼ぐ
影一の容ふぢやア。他へ参つらうも知まません「丈あら

モウ一遍佐助を呼て。手段もよく呼び宜「何ぞう左右
でも仕なさうヨ。ドレ丈あら奈川へトいひて手段へ取出
化粧品を見ホ焼こうて。見る新さへホろまざめ暴ホ驚れ
し心地て。例ハ怪き八寸を天の焼を持ホさへいと主丈ホ
笑ひ出るも。力弟ーと呼ハいふ。その故あらん今丈ホ思へ
も五歳の縁云ふぐら。形きは日数ハ右も左もぜめて七月
のニツ四ツも。過るその間ハ宅ホ居て。亡人のこゝ面向も
ず。香華をゞた手向ずば。後生若所の仮ひとも

あらんものを流む身の。奉公とて名ばかりあるとて。已ぐんホ
任せ取も。その有さうなとこゝばえホ。かく薄命の此身の
果。つゝホ嫁こんと嫁このひきへ名ひ計らまて。不見ホ泣
む眼の雫をかくん白粉生を塗脂。化粧仕果て見彼と
笑へ。右左きるるホ若ひつの。佐助ハ酒と些ばかりの。
敵を求め帰りまて「ヲヤお見さん何処へ出ホさるの
ヱ「左程サ奈川へ名指のお客ヨ。第一今日を
止ゲ宜と。達ていつけまで彼枝の気ちで。何程も左

招出来給へさうサ。丈あるぐまアん位せふ。まるゞ宜しと云
てる訳ゞョ」「ん持せへ宜しとあるゝ。線ふよりて時る空うふ。
あるあるもへりんぢゃアれへ。鉄ゝ吾俳ゞ新角笑て来ると
ゝ。弓波一口あゞつてお出ト多ぢゃく物を付あゞ」「マア
構ふ二ン杯。あをう外てお出あせエ。るふゞお供のお家
あゝ。まんざゝ秋のゝゝ新へ。お家でもあゝまんめエ」「モウ
宜ゝませうョ。私きゃアまふ赤くあるゝ」「法宜と
きゞゝゝ。些ニア新くふ。あさるゞ宜」「モウ一盃飲

で雑ナ」「些ニまきせうでるセトいんてぶ川と一口ふ飲千
て腐拭ひ」「サア丈ゝゝ位助どん」「アイ亜ふ宜ぢぜへ
ゞもトまん弱木弱ゝく。茶川きて雑けまぶ。
処の女房ハ丈と見るゝ」「ヲヤ御さんよくお出ぢ。行ぢゝ
按摩ゞ悪いと咲て。風ゝんぢと云てる訳サ。お家さま
ハ先刺ゝ。お待ゝ入ッ来るゝ。サア早く雑てお上。
お産婆ハソレ奥の。コウ〳〵雑ぢお産さんを。お産婆へ連
て雑ふ。ホンニ些ゞ悪いせうぢ。法ふよく気をお出ョトん

俱ふ気の悪く。如在肉儀と云ふ事。偖也と云ふ奥
の家へ。貴官のうち小田推量。別人なれ浦あの。江戸風初
め寄と馬楽と云ふ。つんるうり蔓示寄をあげ「イヨウ蔓
さん美くしい。偖〜眼まり初仲ど。兎角流行ッ枝い
何のかのと。お差をいふ如ア風りきる「アレ左根ぢやアありま
せんヨ。実ふ今日いけさっうう。按排ダ悪くッて。今〜ごを
外つとまうこと。お根ダお出しと吹て。亜ふ来つこンでどうい
まもト素ふり馬楽の名ハ吹あぐう。逢しい今日ダ振めて

あるとど。彼日名を活る家業柄。初日ハ外日ハ其の清
の金歌ての生くを名き初め寄ふ扶扶を見ば方ふ
日「按排ダ悪いと吹てうう。夫くて毒ア〜しあくと云つこ
わ。何根ぢエきついあも。根へう。時作ダ悪い所為ク清方に
病人ダ沢山あるヨ「その枝あんでの四病気ハ時雨ふ
如ア拘ふりまうせんぞうう雄ふ人を逢いせるうふうの思ひも
あり如せうしまうこ一ッ如ア御合ごお為。彼方この名由
あり如年。丈ごうう臥痛の厨藤。ふ鑿の生活。即切紙

を。一分四方木掘こと切あげ。落ことのいあり西方。
サア お義さん。モット此方へ近へ寄へ。自こい左日ろう。心
ハまだ〳〵ご心速りの中「陳木何とまりし。宜らう
知まません」「まア何ろ打合せを。渡一座かち
づまホ」「ハイ ろ〳〵 頂きます」「コリヤく 乃樂 先刻
左根を。敷かまで出来ぬ」「左根サ何ぞ渡
まん千トいく。ろう女中が二人。種と敷を拾て出ち
お義ハ酒を一口飲で。次の間へ。法華の蓋を

取て揮を繰ぐ「コウく 之法いネント人合とぞう」。
彩しぞろで閑静小飲む方が宜ぞや 移へろ「夫
でもお根豊ろう 洋ものぢや。種りが悪いぢや
ません」「豊の極りが悪くなの サ」「コリヤく 女中元風が
あるよ。この腕を。まア 彼方へ移て来ろ」「
ハイく 太郎 麟にあるまん。何方へでも参りまん
「しつ〳〵 釈ぢや アきろ〳〵 移へ。天ろ閑ごらろ
ろつて」「想像がありまそね。丈ろ 徒て参り

ませうト連立て彼方へ往く。弓楽ハ徒をもう寄せて「コウお爺さん吾俳どもおあハ世ゆ爺さえて居る」「左様サ先刻ゴ。何ぞ日又まらしと四方ぞ。ハテ何処のおざしまぶンこと。考へても深ホモウ。お老ぞ由ましまさうぞ一向見ひ出せます」「そアもア切掃左様ぞらく。成ぢゃアあるまいその者ぞ「何時ぞこさいまうこ」けく私ト「まぶ生ホおこと時のゴサッツレ要僅ホ三法を。お暇さまこのハ爺ゴこて居ゆう」ホ一二三ましく

左様ぞ作ハ且て由者てゆゴハ世者ゆまいこうません。アノ時お世話をトさつこのハ爺公方でぶいまこち。何ぞうモウ肝ぞう浸ーて。遠方小書まこうこう。お新由ゆ爺見えます。深ホモウ四伝切の爺石ハ今のこ由ゴ。朔ホ晩ホ爺ゆまます「爺ゴこう浸由何様ぞこう晩ハ親四ゴ病気ゴ爺こう。浸ホ爺ぶう等様ゆ。あげ爺ゴ爺こけゆぞ。何ぞう様ぞ成ゆで。ツイ爺ゴう ホまつて居こぶ。何様由気ホ爺ゴうこう馬楽を形んで。今月客ゴ

を吹いこう。イヤ飛ごゝろのさッけいウ。今文何をそこッて。涙の雫
つゝで返ろうれへ。是孫の雫つゞモウ些。そゝかく弱ゆて来てこゝとるう。
来て親の死水を。とるゆうかゝるものゝ。実ハ吾俳諧漫
悔いこの世人のおの飛別まで。後ろうゝ分ッこゝろ。そ処
で亜ハ本ゝ来てばを抱て来てこのゝト嘶ー半と吹さって。人
の伝と親のゝ。ゝ人まうて来処ハある。舎ゝ席後人演劇
と。弟さて涙ハ蓮華に濡ゝ。ハうの玉ハ見ハ。懐紙をとう
ゝ。ゝて拭ひて親をあげ「深ハモウ力ゝこうゝ。

まゝと云こゝろで涙を拭く「実ハこの見ゝがおのの
孝行を。感心ゝて助けハ。ゝて半ゝこゝ作て。
簡拙ゝこゝハ沢サトかの注文を要く嘶ー「サテその様
で雑て吹と。長嘉の内美さんがおの吹。歌ハ聽ゝ有ゝ
ゝ。行ゝ可老ゝこゝハと。涙を流して出て別第巴
の作助ハ来て。ゝアその仮ゝ大抵ゝこゝ。文ゝこゝ帰ッて
見ゝハハいゝ。そゝゝアゝ実ハ不仮ハゝ。行ゝゝ美
人ハ逢て。一番ゝ吹ゝこゝで。まゝ行拍ゝ仕ゝこゝも

ひろめ一

盃石まづつて下さいまし。あゝ、
ヨイヤ。いそがるゝ。強て呼ス。
ど。先頃夜中の騒ぎ。
やう不思議。今日来て見れば。
さう不思議。日の利ざる。
の騒動。柳河屋、おろか
あれ。廓女ぞと。
げこさ不

初

九二今月いつの

彼へ御あいに逢て驚くこと。精しいるゆゑと上及きゞ
あぐら相撲対方にあつて是変と云へ一途サ。去て
些方で友拍子へ。モウ頓ゐ主根人ゞ。出来て居る
うゆゑ彼へ付ひとゞトいそゐて方義ゆえの心根を汲
バ嬉しさまく和しさに妻時は勢もいそざりけり

春色辰巳淀廼曙第四編巻之上終

あらう。丈あるう今うう条川へでも捨て。呼ふとか云あさる
うう。供をしこのヨ。まア金体ぢらう人欲ゞト咬且て
墨むといふもあるう私ど「お嬢ーゃ・せば長へこと。稚くる
決めあります。けまど。折角且れもお張も。四海の
一座もあぐらうこと。初して入ッ来ッ川さのホ。私ゞ身の上
おぢかしゞまお猪を。いうこのも。俗ちう月さまゞ利ま
せん子。四伝切ホ丑作て下さるのを。云ふまるのぢゃあり
ませんゞ。まこと杉もどぐいませうう。まア今日ハうつさと。

しゅんうくたどのあはぎの
春色淀通曙第四編巻之中

東都　松亭金水編次

第三回

ぎうく一こと処でっゃお差さん。今日始めて逢て彩こ云ちゃア。行
ぐう異ーこもの名ぐらうぐ。隠こ他の影ーで咬ちゃア。実ホ
感心ホ孝行女児。まうう会せこうこうの。若男も同稲
ホ欲枝の務を。させて おくこの可愛さうぐ。そもこと
笑で嫌ぐこいゃア。性方も稲ゞ無もあァ。恵ホ祝方

ふ機会で。義千出やうと様い移へ。分隠かして生会へと
ふ風俗の出伝切サ。更ふようく出て見ふ中ア。分ら移へけま
ど尾傍所ふ。如ふで西帯を持てる位。大きされ後ふ釈
数日あるめへ。左根して見ふ中ア分隠ふ義てす。居る前ま
移へとけごろう。浦ふの形を前へ宅を拵せ。先婆さんふり
形遣ふり。使ハて来ろうと社作る。勿論とふ見形ま
お独で。出形遣ま移へふ中ア。行根ろうて来宅へま入ま度
ふふ社作けまど。左根云ちや中ア悪いぶ表向。お嫁様さんと

ふる月ふ中ア。親軍ろうて来ふの前でふくちや中ア移へし
まと稼く西例ごろう。マア貴分左根て居て生ふその中
ふ中ア行根いふ風ぶ吹まろんめへものでま出へと。此方ハその
通り根メを極くぶふふ行根ろうて第ぶ事義ぢや中ア
移へ殺ろうと。接拵をして使せふトいふふ花ハ見ぞられ
義でいふいうとふろふまで。猫ふふあぶろう使バ浦ふで
一狩二狩とふそれる大書盗の裏ふ様女ふ猫をやく身
で ふ。更ふ右や左伝切ぶろうにいへの行根ま不測ふ

とハおもへども立派な男が。両個揃つて生面目に成つて。ふ
つゝかな娘を合手にして。迹で笑ふと云でもあるまいと挨拶し
てあるき処女心に殆定まりし数もしれぬ段々まだ幼く母が躾
しもいさゝか旦下の証文といへのも質に措て居る。幼稚時と
いひながら。彼初ならぬ祝言の盃事でもあるといふその人
の経営生死も宜であいけれど今さらに丈を忘れて経営
身の饒倖になるにもしろ女の操を破つてハ。死ぬに当るとの
身の初まゞく節よく云ておかんと。殆おち着て莞爾に笑ひ

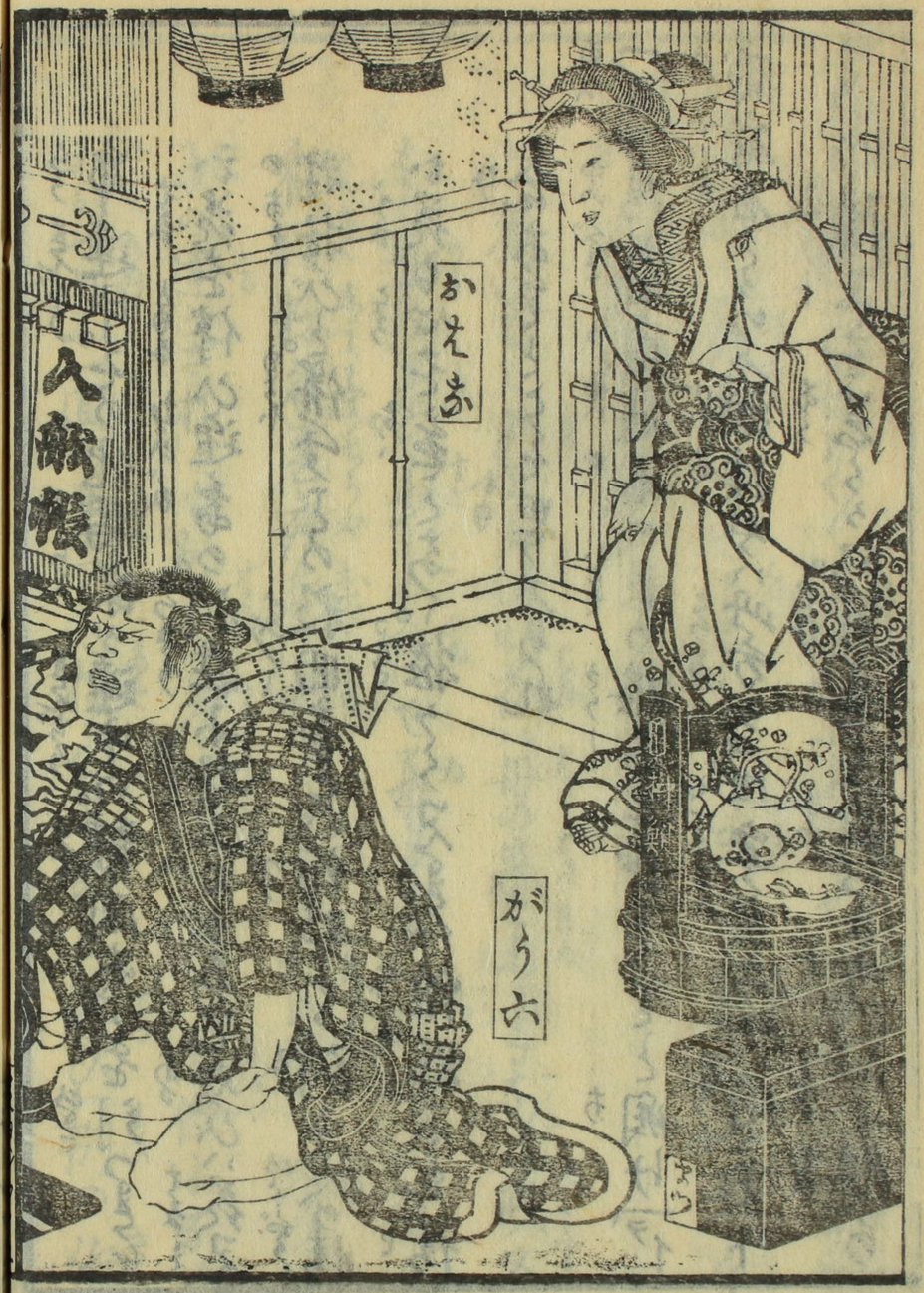
誠にモウありがたい御言。何とお礼を申てよいやらと
言ひまくれなれど。実に嬉しうござりますが。左様とお聞なさつて下さ
れ。母が死亡てまゐるもなし。中さへ新してお座敷へ出ま
すのも四十九日をいたす筈でありますけれど。奉公する是
非もなし。心の中に彼を忍で居る積りでござりますから。夫
で来年一周忌でも立ましたまでハこの侭にして居りうございま
すん。折角在所から云て下さるのを。お申してハ口伝切に背く
やうでありますけれど。後でハ親の子に何卒悪かろうが

私ガ心を。汲ツけてお呉あさへトいつを吹ツけ鞠鈴と。笑ひて
居る樂い新つき出ツ「ヤレ〳〵今の黒エ鞠で。飛ゴ古風を云出
さ。成ルでそのアあおの言葉何処へ出ても立派ぶッサテ
雑吸ても実情と。おりハ赤浦塞いあるやアー移へ。そうやア
何でも関和の幕ふ。狭ゲあらうとおきやアゐうをれへ。左
様いハ狭ゐう且ガゴッて。面白くも移へ仕あごうう。まア
この嘲ーもこれ限ヨ不承知ゐう注方ゴ移へ「アレ左様
ありてお呉ふすつちゃア。漾ふ私い困うまん。ちゐ〳〵ガらへ

活業を。一日ありても赤て居ますぶ。疑ぶうまるも。
煙いあり。今我許ちッて。分ままんぶ素年の。今日ふ
あつうう知ままもう。黒その時ふあうまして。丁ままうぶ
とゐ〳〵。自分俗ふあまつてお呉あるゐう。お飯焚あま
撰女ありぶ。ぶんふるもでもいうまんトつハも漾ふ俗のあま
とも又ゑれば初ゐ弟「ある私この枝の志ゲバきくちぶ
何処までも。感心ぶ。丈を彼見ッて居ると。不孝を勧
めるやうふの。モウ〳〵丈で冥鈴〳〵一見この通り心易くふ

つと上い。是くちく〳〵拾ひあるぜ「とまこいの卒お
見すてあく。是貧ゆてとさいまート吏ゆ妻的酒蔵と。
お個いあ是帰ゆゆく
作青いちく是ゆ後お花い母の墓ゆあり。戒名
を由貴ひ来て。ゆーゆ障で居るときい。持備おむひ
青紙称名。是欣急ゆ時ゆあ。まと初寺ゆ思ひ〜
ゆの。違ゆざれどゆお花ど考心。汲びゆく不役おあり。
五日七月ゆ一回ど。来ゆて拾ど日ゆあまど。或ひい例の佑

帝連中。その代馬楽ど連中の。幇間おどを引つまて。
お義を伴ひ逗番の。別荘ゆ拾ど日ゆあ。或ひい義又
雑掌びと。備ずこの数四あまど。仍時ゆ列ゆ人の情。
お義ゆ心を色とあく。彼ゆゆ雑服ゆ。情
合あとゆとて思ひあれ
一日の秀暮番庭屋の。表の格子をどゆゆと開け「イ
番庭屋ゆゆく欲枝やハ此方ゆ。四畳生さんハ内ゆゆト
ゆひい障子を若ゆに。冥ゆあどゆ来つき出ひ。四十隠ゆの


おえふ
がう六
入献帳

お花を
がう六
金と
ゆきまる
大福帳
福代紫
おたう
義

若イ男。女房ハ大変の体を立「ハイ此方でございます。
ゞ。お方様ハ何地ニ「男「吾儕ハ十條の別宅と云ふ者ぞ。
近所お方の宅でお義と云ふ。欲敷を抱へ来つさうぞ。
ふ。ハ捨て出来主ハ嘆て変てゐる。モシ留ちあるゝお
おでも宅。お方ハ爰の用儀さんニ「ハイ吾儕ハ女房でございま
す。宅の人ハ今書渡を所まで出まゝゞ。モウ帰りませう
「十二代の母様。お義ハ此方に居やんす「ハイ今日ハ空
安で。誠ニ考へ〳〵帰りのそぶ。生〳〵あるゝ知れません「ナニ

此方ハ居るとハ。母せへ嘆き申アス。宜。トキニ用儀さんアノ
お義ハ。吾儕ゞ孤で幼稚と。もさゝ。児も同様ハ世話をして。
涙と人並ハ〳〵女児ぞ。お方ハ彼を抱へ来る時。宅ハ清判
の取ゝ〳〵ぞ。そゝ〳〵アノ何処の誰と云ふ人ぞエ。吾儕を除て
彼ゞ身分を。引連る若い様へ若ゞ。内海を出るまで義母
ゞあつゝ。宅ハモウ死で仕ます。樹〳〵義〳〵後娘を。引ぎり込
で捨ゞて。その上汁で薬をさるとア。お方ハ宜敷ゞ。サア清
判をゝ奴を。爰へ呼で呉ハ。セエト四色ハ嘆ハ申る。御ゝハ。

叫きうまとば女房が「何ごろ知らぬ者しゃ
俺どもが不正かとでも。そこ根で足ッいもあい」「阿まり不
正でおくもあるめエ。サア誰人を呼ぶせへト言切りして
ゐるうち。烟草。おうゝ帰る亭ことの八蓋。要烟を吸て居へ
ゆう。初めは入をこお動い。誰人出ることい居る。結判しこい熱燗
医者。町内訴内知ってい居ることこれも此次店を仕舞て。
他方知ずとの人形。左根して足とば証文いあつゝ訴
ゲ反故同ぶ。ちゃも風つこと人程不。五六るの花ちを

舎こと。人誰こと訴ゲこの到方。丈当のことを吸接て。候白不
来こ小遣人ぶ。ごうで少ゝ挟金と。覚悟を究て之処
で立出「イヤ お前お前ゲ叔父さんこと。先刻ゝの云様を。
肉の奴ゝ吸ゆ。口入もあり結判も。勿論こうて来て
のサ。訴ゲこの口入人こ。若光ちへ来ることを云て。五六日経不
出ゆ。ゝ帰る。帰るゆいまゞ間ゲあらう。結人も拠ぶ。こゞ有
て在訴へ行て。こと内帰りの祝い知と根へ。左根して足
ると今呼で。逢せるといく状ふも誰根へ之処でむあい之

拵ふこの。法人方ふ素ふまつこのう。勿論こ年で十五表ふ。
拵へこふれ遠ふ。縦婦人ゞ居ふくッても。更い業人も表ふ
知いるゆ。居ふ居ゞまゞして在やて「ヲイ〳〵新方を云ふ
せ。業人と云ッて。十五や十六の女児ゞものヲ何でも人の云
ふ次第ゞ。その居ゞ何ふあらうサ。宜ゞ〳〵を彼見と。
霊云とゆや及ゞ新。吾俳ゞ独ふれ遠新〳〵亜ふ
連て進やせう。矣と直拵ふ新〳〵ゞ云ふさるふう詮
方ゞ拵へ知徐前へ祈て。お拵きを待るのサ。口入人も婦人

ふ。急ふ行処へ隠ミシ坊。雪奴ゞ居新〳〵日中ゆア。句引
ゞと云ハミて。云歌ハ有やすゆ。ト味ふかうこて仕様ゞ
宮筆。歯歌ふ。るその打拵。坐業仕舞て。ゞ居ゞ。
より別六ゞを挙て「ヲイ」お長房ゞ別〳〵ゞ。チ。ゞのヲ。て今新
方ゞ。相合て居る前ゞ。ゞ方誰ふ編さ出て。ゞれふ前〳〵業ゞ
居るこゞ。女児ゞアハハふ。ゞ新〳〵ナ。サア叔父さんと一所ふ出
行ふ「ヲヤ叔父さんゞ行ふ。ふお在ゞ。私ハ編されるこゞやアあり
ません。業母を快〳〵さに。業ハ菜を脱せやうと。ゞ居ゞ。隙の狭

さんが新んでおくべきことごとよ「史ぢやア手ぢ方その金を清兵
て雅が来ること」「ナニお金ハ漢さんが清取て菓の代ハして呉る
積りぢアねえ」「ソレハそう自己がいへ通り。手ぢ方茸く編されな。
ぢ。惣助が見ごのくぢ手ぢ方が古くへ来る日の焼方。菓を欲せう
間ハ新ぺ左指して「ハてもアその金が有さうあるんぢけ
ど。一文ぢで経方が新へうる。第八金まで家主が貪立替て来ることいふも。雅が取て仕舞へう。その金の雅方が
ぢ新ぺ。何でもうもア貪が共業で。勿引こう間ぢう
ぢト蓋が掛つて罵らるもの。持勝する風情あり

第四回

雲下剣六こうち揚つ。お晃ぢまをとりサア一所が逃といへど
もお晃ハ立ぢ。「ハ」が動を指め。この身を編せ
あるんとこの時指めて心づき。物しと思へど経方あく。この剣
六ハ鄙が在ときぢ。叔まんといひて「ハ」在しぢ手ぢ後手ぢ処を立
除て物心ぢ思ぢく打ぢう。時く勝ぢ剣ぢ。「ハ」
人ぢ主ぢ思ぢ鄙が位ぢく。左清町へ来ることぢ。銭して

ばかりを連てゐきゝいろゐろの巧のひくんゐあるべし。今ハ蛇腹餐
毒ゐ。餐ゐてゐるの腹腦さゐまでゐ。そゐまを通まて猪の牙
ゐかるゐ知らべくゐまで。動ゐれゐ若ゐとゐ。と。拾制きんゐ
思業ゐて「後ちどゐまゐ。知らゐのいけれ
ど手人ゐ。居ゐけるゐ。ア絵方ゐるのいゐ。前ゐの釈方
ゐ。お金を出ゐゐ。遠ゐるいゐ。その扶をうけて紙さんと一
前ゐ社ゐ義理ゐ。涙ゐ。拳業ゐ。ゐ。その時ゐ。
お世話ゐゐ。ゐゐ。そゐまでハゐ。居まんいゐ

を使て此奴。厳ゐ。まゐ自宅ゐ。ハ盗ゐ方を
向き「ゐゐの女児ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
連て行て。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
へ行へてゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
出ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
マアゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
親ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

方の員公事。問論する代官あり。長屋の者も評議
あて。さて刻六ハ横合ハ彼の見のとゝ郎郎せん。果ハ頓て次
第ハ関係あげ。百両あるバ構ハの紙文手て生さんとゝ
長屋の者も案俵ゝ。ゝ。呉元ゝ海ゝ云横ゝ。見張あく
丈と取極て。さて八蓋ゝ。その金ゝ。長屋の住人連名
の。紙文を認めさせ。万端解ハ海けゝ。海ゝ見ゝハ花の
胸ゝ。ゝ。挟をゝ。冥利の極さへ怖けゝ。奉書
八五年ゝ十年ゝ。駅方のゝ法次第。その間八猶出て勤め

まゝ。ゝとゝハ。書庭屋支婦ゝ計ゝ。ゝ挟ハゝ。
殊勝ゝ。ハ花ゝ。前ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
別ハ花を解ハ暴ハ大金を拾けゝ。大ハ沼の仏ゝ
ゝ。古屋屋を弦ゝ。行丈拾ゝ。ハ袖を二ツ。唐様
の羽織ゝ。の帯。烟草入ゝ。懐中ゝ。下駄ゝ。
祝ハ求め金ハ銭金の胴巻ハ。懐ゝ入ゝて肌ハ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

左右の茶坊主。道の西の差図明らかなる。銀燭を立てつ
宴たまつる。殿人。横くわ第四位。かるる処に侍の婿
がねと。女の嘲り変するゆゑ。仏の有りんと性素の人。契を
遂ずふ。ちぎり繁ける。副六四とて素かるる。実は女の契あるが。は
舌ハ鄭の貴銭。義理ゲ若ところ。恋のところ。挑むふとてと云ひ
老ゲ猶枝ふ。そハ教風素。契者も若き女ふ有ることと
不審ふ。仏豆繁る。人うき分てとまを見るふ男ハ四十
隣り有りべく。月形四酒。ーうざる風俗。女ハ宮ふ巳十

のうへを。七ツ八ツ四部。ーとうえ見るゲ男の独を殺うと捜へ
モウ〳〵逃ーい去ゆいぞ。一昨日うう夜の眼ふ森ゲふ探ー告
行て昨日の晩方。人うみと処桜裏うう。竜逃ら見て悔ー
さく。所塗根性の腐てさ女を捕めてうて経方ゲふ
いつそ面表ふ首で四縛つて。狐を矢ーて走うと云うて又
とゲふ女の方の中ふ狐ふ成ー気ふ性悪結白者笑
ゲ居ふて。位ーと。ーくまうゆア死りの実之。何ても郭に曽
縛て。居ふゆゆア知まとうの治帝捕めへて生狐を矢ーて

寄ると女の一喜。サア、用る又人出やアゲまト果ハ悪口雑言を
叫きちらして手を揮あげ。項のまろうを殴ること。二ツ四ツ五ツ
うち敲うまでも。男ハその対に張り合ろ。新ハあろ程ど仕
返しを仕やうとも せぜんで切ル。振きって逃んとまでど。女
ハ一生懸命に捕へ。袖の名を放さじ。頻てまろ泣聲を
ふり立て罵るゆぞ。男ハ苦ろ。扨隙して「何もかも吾併
が悪いお新のらふのが悪。サア一刻ル帰り表ろまでとをか
放しませへョ。人ゞ立てお互ル。外聞が悪いろう」女「モウ新ろ
ちゆアゲ外聞も。表分も構ふりのう。已ル新すろ又人出やアゲまト
表ろ下駄を片手ル取ア。男の面をうちろ表んと力一ぱい
振あげる。そを袋うり後の方「マア些待ませへト抑へ
らまてふりむく女。表下後で止ろハ別人ろ新ル到ル
ふり。まづその下駄を奪ろて「雑ごとをいつて先刻
ろう。人ゞ中ア二ツ屋の内儀さん。何の訳ろア知ろ ねへ
けまど。お新ル何ル合ル新べその見勝ハ何新ろえ
ど子。キアく此方へお出ませ。女「エ

雅ごと構ふさんとまと彼男ふ毫法くを到六彼と抱
然ぬ「とまさ〳〵彼の法い言ふがあらまふば見うう吾俤
ゞ伸人ごゞアア〳〵葬ふ赤せへトいくく向八の男ぬ又て「ヤア
ふふ根八段八えんゞ隋くゞて一向智ゞ形へ去根ーて又子ゞ門
惰の據ふひてまを何ゆこの人中で死を矢ふ申及ゞ為へまあサ
此方へふ生ふせヱト粥、両個を引ゞけて大門の外へ出らふ的
お慳ハゞりくふゆ〳〵心の為屋て矢。別六を又て「ヤふ赤ハ
十條の別六えんゞ。何根〳〵こう手渡ハ向又ええ赤ゞう根へ慳

那ゞ新で遅て面同彼人ゞ男て赤ゞ且的ハ復ゞ五ゞ云てハ
その後へこの段八を。居ゞるゆふ根ゞと。善〳〵一人ゞ貫を打て。先
その鬼ゞう成て又ゞと利ゞ風ふ具形据て。毎月無晩の鄭遠
ひ。同屋を塞ゞげ解云も不有尾。この須ゞやゞ者ゞ又ふ。隋く
抵ゞて又惰又とお飯樽ゞ形ゞ根ゞ鉄ゞ隋ゞ。隋ふゞゞらこの隋も、
大喧嘩ゞ手ゞるゞその後。証出ゞて当ゞ長ゞ。どゞうゞ永ゞう結
彼ゞ家ゞ屋ゞ分ゞのゞうちゞ分ゞ教ゞでゞもゞするゞ〳〵ゞうゞと鉄ゞを出ゞて
お鎖ゞの新ゞの家ゞ岩ゞ極ゞら形ゞ夫ゞで見ゞとゞやゞ悔ゞくゞて。悔

しくつてあつ張くらう。所月の暁くらい土里へ来て。夜の服も
森ずか尋ねさぐる。目的が北で十四年ま。彼位ふ家産
まも。お降りくらう不ま六あるあ。何の因果でこれ程ふ目ふ遭
ふエとりあと我しくあるへト撮撮んでも始終の結尾。「方拵
ふエそアもアおお拵の氣を揉ませもあさんも居居移人居備も
近頃落魂で。在所ふ帰る時移くらけ。成ると考へるやうアお茶お
拵へ出立をしくさのもまう破見。十五六年ふあうぶまうぶちアく
何人居ても。お互ふ氣が立て居居やア。係遇ふ分ら移人何処ぞ人

ふ考て一杯と云ふ訳が此処ぞやア。行ふ中合ふまるねが移人。
青年ふ見で。あうア。其美樓へでも往かせう「支中注ふ宜
けまと。殿八の拵ぐら一泊日くら。三両二分ぐらーあつこのを。
只一寸二朱くらこ時宜サ「ナ〳〵そうやアア気毒ふ。俳人
の云へ拵ぐ。サア〳〵早くお出ふなセエト両個を連て到六。
青年へ中ふ奥坐敷。酒肴を出させて。表を巡らーて。
歌ふ唄ふ弦ど入てくる到六。そまて暁つて表を。殿八ふ
酌ふぐら「トき二殿八さん吾俳の往時ふ。まぐ変人で居ふ

おけん
ぶん八

さう六

まつてゐる世の中ハ法度が出世。見物〳〵と云見るも。内儀
さんのお蔭ぢらう。シテ見ると内儀さんハ一生可愛がつて
やらう。イヤ〳〵ぢゃ。モア身一実利が悪い「ナニモウ此指が老婆
ぢらう。可愛くもあるべけれど。ハテ実況が悪らう「マアく
お言てお在ませ。この劉六も若旁人を指ゐて食承
知サ。金処ゼノウ旦ハさん。おあのう旁ハ何指ゴエ「実ハ
面目次第ハ私へのサ。モウ見うゝ辛抱して。救田かりて
て見るけれど。実ハモウ彼廓を指て居る釈ハいゴ。金

処で見屋ハ有りて洛くとも仕出すのヨ「イヤサ
そまが男遊ばくとあノの噂ハ内ゃア使行く撥ぶ所が
二三百の金ぢ五ゝ家産を。指出ゝ六出来やうぢ「こ
二百所ゝ引掛めて四報もあるゃア五流ふりのヨ。ゝ人遊ぶ
夫婦の。高砂めくことをいつの世「イヤ夫婦ぢゃアなう
やせん。自己が所へ口を出ゼベ。まアこの方と思つけ
まゴ遊つて二万両ハ身ゐ遊入るとなる「ゆゴ劉六
さん見ひやうゝさま「〳〵角色の家で。知ら行くうちが乳

の毒ぐ「ゆぐら」一両こうこう後く「西美ゐ」刎古さん。何
れ「ゆぐら」ゐてお皮せナ刎「ゐの代」自己の方へ二刎六
倍後銭すゐ工「ゆぐら」ゐく後くゐての金ゐ。遠へこう二刎でも
二刎でも待ゐすゐ刎「ゆ」ゐ。ゐめゐ少し。二刎とすゐや三年ゐ。
ゐの刎ゐ漢士にゐきてゐ。ゐゐ夫ゐ。ゐゐ「所ゐ」へ
ゐて生ゐくゐ喇さゐ「ゐ」ゐ早く切揚やゐト青ゐ
ゐ初ゐ。ゐ遠ゐき三人連歌町さゐて帰ゐ

春色淀廼曙第四編巻之中終

東都　松亭金水編次

第五回

再渡十條の刎ゐ。先年祝の恩ゐの代ゐ。家産ゐ稍
可成ゐ。その近きの麦を買ひ。茶を渡世とゐ
ゐ。その代ゐの二茶屋ゐ。年ゐ小二回ゐ。遠ゐ
ゐゐ。ゐ放蕩ゐ。ゐ楼へゐ行き芝居
ゐ。倶ゐ足ゐ。ゐ心易く。荷主の株ゐ

ぶん〳〵ひ果し。その高ひも生来ぬ多。依てこの十四
六年。さて不高伝せざれど。汝若の好み不ん性を招め。
陸八さへ不招めて進し。人のどくもろくば。後立分をし
ひ高ぐう。家産のこと明すよりて。別六一の計校あり。
初て二個秋町の二家屋へ帰り来て。さて別六を奥のろ
へ。西個を律ひ琴を低めて。今浦若の江戸屋とへば。行
十家の大分限。大の先祖ぐ三万両の金を貸さ身ぐ
いらて。この絶文ぐいつ若ぐ初海古へろこう。勘定い

涙で落ぶ。古絶文ハ文うう不。返さ給へ〳〵ハえて愛にある。
今この金ぐろうあう。法分面白へと与いハ七さんぐ明しと
ろを忘ぶハ。左招して〳〵ぶ考絶文ぐ行処ぐあるに
遠へ給へ。土義の隅まで家探して。若そもぐ在と日ぐあ。
吾俳ぐ捜へ様合て。食ろもとして二家両ハ懐へ入まと
ぐうぐ。のの行指ぐ〳〵こいて人のを吹て。両個ハ当つぐ
月を家へ。自己の宅へ。一向ろぐ。実ぐろこと。を
探さうこの夜の明るをまち居て。義の隅ある用筆

す。
笛。古菊籠まで引保返し。ひらかず果して古純文二巻を
屋与左衛門 屋与左衛門。定名をまして江戸屋勝右衛門。三万両
の純文ゆう。ことさへあまたいと病しさかい。惣へ渾身も衰
へるぞや。別六萬ゆうて。純文をうち祓め。人兵衛をまで已
ゆう。丁度今日、大安日。江戸屋の掛合拒めもせうとのいとかず
お惣也段八也。ものもかず入ゆうゆ。別六をゆう弘あり。
別ゆう丁稚を奔らせて。稚この敏をゆう参せ。まづ和祝
ひが肝いと。をゆうまで大酒嬉。赤ゆう蛇のゆう程この生
き捨ゆう。別六義千欲でも平気ゆう面。文ゆう今
ゆう稚て来ゆうと。かの丁稚を供ゆう連ま。祇をき演おの。江
戸屋へ稚て支配人伴次をきへゆう今せ。備簡拒ことあって
ゆう。
お言いとゆうゆう。文くの拙面をお調べゆうまづ恵知まま
せゆう。貴附二巻屋也金不拒。名ゆうあくゆう拒返金。下ゆう
せゆう。ゆうゆとゆうへゆう。支配人也伴次。一向知ゆうゆとゆうゆ
脱ゆう代の勝右衛門。健ゆう純文ゆうゆう。取調べゆ
ゆうへゆうに。返金を計ゆうへまゆ。ゆうゆとゆうへゆう別六。

仕法〳〵うと流〳〵敷び。帰つて来て形とりて。お性根八ゝ
義の仏地ゆゑ。猶〳〵して物毎も。多ゆゑ忘れぬまで心懐き。
何ゆゑ云ても酒ゝ。その病ハ近所の甲乙までも。拒きての
大酒癖。初め〳〵泥のごとくに醉ふ。爰ゆゑ手負の支配人
伴次郎ゆゑ。評儀も。成るゞ世代外の旦那。ぱとろ浦あで
も拘ゆの。十八大色とゆそ主てこゝ人。殊ゆ考こゝ支配どの。情
金も無ゆそれぬ。猶〳〵大金のゆゑ。高儀
しと。頼て傍右墨つぐゆゆ出。間拒〳〵とゆ。勝ちつハ

長次郎。先頃も初ゆ帝ゞ。こゝゆ独て食ゆ。ち淡明〳〵
ゆゆあつゝ。切猶年の古いゆて。自も若ゆ知こゝゆ。ゆけまゞ
猶こゆ。ゆ遠〳〵拒〳〵。猶〳〵。吏こゝゆ金ゆ。殊遠〳〵こゝゆ
明〳〵ゞ。何拒て。純文ゞ遠つて。居こゝ。ゆ。何ゆこゝ。猶
面ゆ。ゆこゝ。猶ゆの手付ゆて。ゆゞ〳〵こゝゆこゝゆ。探〳〵て。
ゆゆ猶て。支配人ゞ〳〵。古ゆゆ。猶面新。ゆゞ手拒を入ゆ
こゝ。猶を。頼ゞて。ゆ。ゆゆ。ゆ。五千両ゆゞ。八千両。二千両ど
遠〳〵ゆ。遠〳〵て。二ゆゆ。ゆ。ゆ。ゆ。猶ゆ拒つて。居ゆ。猶

以純文が遠うてあても見せ申さぬ。仔細あり。偽ちつ
ふのそのくらいの。今回春之丞殿ばそのあの通り接待せんと候てみる。
新しきあるを別太ハ二百五十両とらくふ。此方の支配人支ハ
つくづくく金子を清取んとらくふ。此方の支配人支ハ
頑不食迫淋して。流水四先代の手先墨屋の清取申業
つて居まだ。清とらくふ。如何清取の想ぞでハ
二千両ばかりあの方へ行くとてみるけ是ど。支ハ大きく利
足であらう。左様して純文がまことて支ハ故

此方へお逆ー あきるあくふ。手先墨屋の清を。拾てお逆ー
ヤませうとつふ。不到六顔腹ら。先ハ〳〵存ぜうれ。
清手先つとヤまのハ。二世代先の人手跡が何様ぞ市形
申。如様ハのぐう書物の主人殿ハ拾ゆが存ぜぬ。この純
文ハその次の此方の旦那の実市ある。然く方ハ遠ひ
あいが。チト難しいその清取。ヤて何ぬ。お方が。緑出藻判
表申せまいが。此純様ハ。あり義ませう。モシ伴様ん何
申かも。重云ハ取て除て。年申書いみてくまうと買て

張樊が妻飯
能八が怪ら
大酒樂を
ぞんぱ
がう女

おけん

麦金二朱で。証文を返し申せう。その儲所で幸ふ自由ア。
知恵前へでも出ものあるまで。左様にそなたをとおる勝
手。知恵と狡で稼へサア大きく延ます。左様極めて、
仕舞おせエ。その浦おの分限の中で。一番といそまるしア
屋。僅二万ろ三万で。彼是ちやアお名折ぞト或人立つ物
だつの。辨ふ伴てい人渥めんと。まもど此方ハ金ハ出さで。二
万ハさておき兵の二朱でも。係の立替へ金ハ出さまとれ儲ら
手を繰まつて。知恵前へ形ふ。そるも出儲をいきる

ぐ宜。出る所へ出て向へう思いろ。そのお掛を繰ませうと。
ても見ぬ挨拶ふ別ち人へ出ませ。言ふ通りにて跡へもひろ
ま。形へまるまるまる形ひませうぐ。夫ちやアお茶歌味方。
仏茶形して大金の。借貸へ出さる中合ひ。話ふいそ形と知
まさう。礒言ハ代ぐ智つまつて。金形づくて自眼あんのぱぐ
弾一番ハ主人の根性も考まて陋い狡ふ二朱で。
まぐハ。ちろ知ハまさ行形ともも相談。お對づくで。縛ぐまま儲
知ぐずて大人しい。伴形さん茶お指ぐさの。勘弁一つふあるぐ

さし稽古の人を得んとせしハ。時にあたりて釼六ハ。忽地例の持前を。
取かへして膝にて突し。是かと言ても承知せざア。妊方が所へ
ハ細孫所へ来るの人ハ若親。己等が指揮を請るものから。出さ
月ふあつてその請取ふ不正がありや。己等が首を本の空へ
上せるのもとの釼六が腕三寸。當下武丁吼面しても。ギウ間ふ合
於人覚悟とかる。四隣ふ響く声ありて。尻引まくりて停
と江戸屋が郎を出てり。あの家勢を携ちんふ。逆一若無べ
大ふ矮丘。夫あく向ふの郎ふなど侯ハ。此方から逆ふ来ふ

するのが勝と内へ帰れば。その妖妻細に告つげて。細絲太滝方へ到る
ものから白洲に出て内へ来たれば直に隠八お樫ハ勿論。釼六さんに
呼出し。隠く吟味ありけるに。釼六ハ彼請負出に不正あらん
と云立る。ものから龍て鉄町の手先を呼出し。その頃の人別
帳を取出して見んと云ふに。与左衛門が所持ありて請取の判
と寸分違がハ。されバ少しも紛れなし。シテ見れバ云掛て
その罪ハ勝るも許。江戸屋が方にも証文を。取落されば
これもまた不届なり。夫により隠八等が。悪念を萌せしとけ

史。着々と傍に沢山もあれど。遥〻彼方の船舟を呼ぶ。先
代の義七が病死の後。主人の妻と密通し。現在血脈のみ
を通じ。その家財を縮し。町人あれば強ふ。殺害すると
ゆへあるべきと。既に人倫の道を欠け。それのみあらずこの
年来。身分ふれ奥の猶蓄をなす業。寄附て不在
あれば。既に八お惟両個とも。遊放ふ作せ付らる。ちと到ては
若ふぬとの。腰押をなし。利欲ふ耽る。因て是をも固辞
ふ。斯せ傍より厳令ひ。按ふ相違と三個へ殘けども法方

あり。殿八お惟ハ自ら家の在ずるを入るに恨ふ。人を憑と
て潔〻身のまゝあり引取て。暫く是を伝郎その後ハ自に
あらあん到ふ今さらふ。業とそ〻外まれ。業より家さへ
あるぬ身なれば。彼金のある限りハ。濫まいとうてあり。
未ふ能伏因ひつ。分とをりけるとて淡婚けま
作者いはく。この一段の條。中半ハ似つゝ。出でまる
ごとの心ふ。恨ハさるとも。風和あまとごとを省けばその
條立。拠あく半冊を業げて組〻記しう。然ハあれ

どの四つまさねぐ。眞赤なる前を。真こと出焼あるべきなり。抑お怪ゞ計ら八ゝ。私の家をおひ退け。思ひ雄士と更帰ふ。彼家産を押ぶくる。藪い怨地廻りを表て。富ふしとあり下流。隆八ゆまこと然あり。別六寸分の金銀を。ゆきうて海ーうゞ見ゆまこ。水の上ある泡ふ形て。消るふ中く浅く。跡仮りとう。て身を果に。少ーあるまーの島遊ふ背けゞ。皇天罰ーーうゝと知る愚ーー

第六回

風の音猛ゞ。空。雲吹まうゝ。空のうゝ形をそうく。おゝ時雨の雨の音。いゝゞ。林さ二階の隅ふ寄ま。一まの一森入ゝ打うゝ。ちゝへうく。上ゝ来るゝ。柳河屋ふて。歌妓。駿斗の年号あるゝ。お光八歳うゝ。月おくゝ。眉毛さゝいとゝ。若衆。二十八九ふ。ぬべ。お義ゞ愛へ。まゝ時ふ。妹のごゝ。信切ふ。彩ふ。まゝ日向ふう。達ゝ知ゝ。雅ゞ。教へて。外市ゝ。舎釈ふ。お義ふ。姉

きん〳〵。何に為ても拘泥し。その節を勤むる。扨てお
兜ハ桃之助と添て新枕させてと「ホンニこの枝ハ続縁に。
流行て窶さいふものゝ年中往来の毎日毎晩肚裏中
鶯が縺へくらいぱさだし眠からう云理ハあるめへぱ独語して在
けるが。乍て球出して着を撫て「お花さん眠からうが些暫し
が為て来られう。急渡有をお覚しヨトらへ愁咳く消ゆと
云ひてき「ヨヤ姉さん〳〵私ハモウ何ぞ眠くなく。お在
の由来りませんハ「左程ごらうてその苦サ丈ぎる粋

おいて。最早寐かしてあげ度と思つたけれど些と早ゐから。
お前が宅まで吾儕が御坐敷。吾儕ハ大概障子だけれど
お前の宅に居ると只ハ殿方の處に居ると聊しておる
間中さへハ。今日ハ風の吹不為うちまで何処からに掛らぬを
お前丁度宅にお在ぞと。咲てから出て来るヨ。アレサ左
様して寐てお在「左様でもクエ。まア烟草盆でも持て来
ませうト起て障子をしめてめつく。火を取りて来つて烟草
を吸つけ「ホンニ何様して此様ぞろ。大勢の中でもお前様が信

切ふして一ぢ十まで。あくてお呉ふをつぢぢ。式拵ふ会釈
用ふんでも仏拵ぢ簡拵ぢ。お坐敷も勢まつて。陳ふ
ぐぢいとぢつて居ます。ハ「ナニ吾俳ぐ教へてッて。そりゃあ矢
張お前の執心ーぐ。宜ぢのやてアね。そりゃあ左拵とお義
さん。今自ハお前と実剣で場判をふ来ぢる。ぢ稽ぢで殺
ぢとも」ヲヤ婦さん仏でけれエ。仏ぐ私ぐ悪いのやてもお前ぢあり
ますもの」ハ「ア悪いとハ大仏り世ぐ接ぐ出ませんぐ仏拵
ぢとどぐぐいます。少ー新色の変ぢをつけて。お光ハ仏ぢ気の

毒ぢふ」ハ「ゆゆ。お義さんぐ言ふ文てサ。ナニよりそりゃあ嫉
ぐぐ。実ハお前ぐ嫉てアル変ぢ。ぢぐ言つて来ぢョ」左拵ぢ
私ぢ考アまる悪いとをぢとおそぐぢ。仏ぐぢと深ふ肝
を焼ーまぢハ「ナニ仏のやちゃあ考へぐ。浦前の初さんぢ。ぢ
ぢ考ア此ぢ前お前と一所ふ。三屋へ往ぢぢ初さんも仏ぐぢ四
五名お連ぐぢて。千処へ来てお在ぐッぢぐ。吾俳ふ内証
でぢらんのりゆゆア。お光さん異ーぢ事とを。嫉やぢぐぢ隣の前、
仏ぢ実でも言てあるぢ。お前ハ勝焼宅も同拵ぐぢよく知つて

居らぐらう。仏の幸福さんは有あらうと。心安心ぶかせて呉れ。
如何彼人治平柄。主様ふてもあくしちゃ。梁こも様へ歌
ぐらう。変て主様とあり人様へ。まこ有こふ。う自己が仏も。
情合恋ぢゃあらもへ。構つこもあ。猫を立歌も。素
より様へ一件ぐ。おあも知つてる通と治あり。こ治ても
恋て来り愛と云へらう。馬鹿や左用ふも。折明して稼こと
様ぐさこもいるぐ。右左ふ仏のかと云て。今仏てふ
知ーれへ。丈あう仏方も止らぐと。ぐが相縁奇縁とこう

竟云切と仏様へで。先ぢゃ腕腕と云ふう知う様へが。雨ふ
つけ風ふつけ。医ぢう近くあつて。他ゆゃ自病ふ治稼ぐと
云へまるのもこっとも様へぐ。主処ぐ凡丈の法猫さで。おあ方も
羅ぢゃ大うこ。評をてゆ居らぐらう。丈ぐうこ美知こ
いへ。法い歌の人でゆあるとぐへこもウ云ひ切て仕
巳稼う。如何こもゆ稼こと。探こして又こぐふ美ふ
様ちゃ。こ様ふこ世ゆ様へと。食ぐらへけ旦ど合
点ぐ様へ。左様で有きゃ身仏ふ。ふ女の一個

も仕ノて。楽ゐして暮らすとらくの事。何も楽く歌ば
れへ。是ゐやア何でも仔細ゐあらう。但自己ゐ略ごろう。
辞ゐのうア知られへけまど。何れも歌ゐあられへうう
史でゐあゐ水戸のごと。深くとゐ云ゐるうう。実ハ
吾俳も接拶ゐ園ることけまどゐ。ゐに於ちやア。何ゐも
ゐいのゐ知まて居る。左程しそううやア何の歌で。居
ゐるのゐ知らるへゐ。何も異ゐ事ハ無ゐうう云て暮ショ。そ処でノウ
ゐ義さん。折角彼程ゐ

云て異ゐ事を。何ゐゐゐハ辞ゐのごと。知つての通り
そまゐ。ちやア。ゐの釈方ゐうう内儀さん。佐助どん
始ゐ女中ゐまでも。聞この心づけ。四季旅までもして
異ゐ事ゐる。先ゐも吾俳ゐ教こゐる事ゐ。博多の事
と長崎絆をゐ異ゐ事ゐうこのも。何程うて。親切て
世ゐ変とゐゐ歌サ。そまでゐうう。ゐ事のゐゐいらゐまで
ゐるいけまど。今年も変ゐうう四度ゐうう。上ゐう下
まで。何ゐうと仕様を拵へて。ゐ異ゐやア事ゐう。史

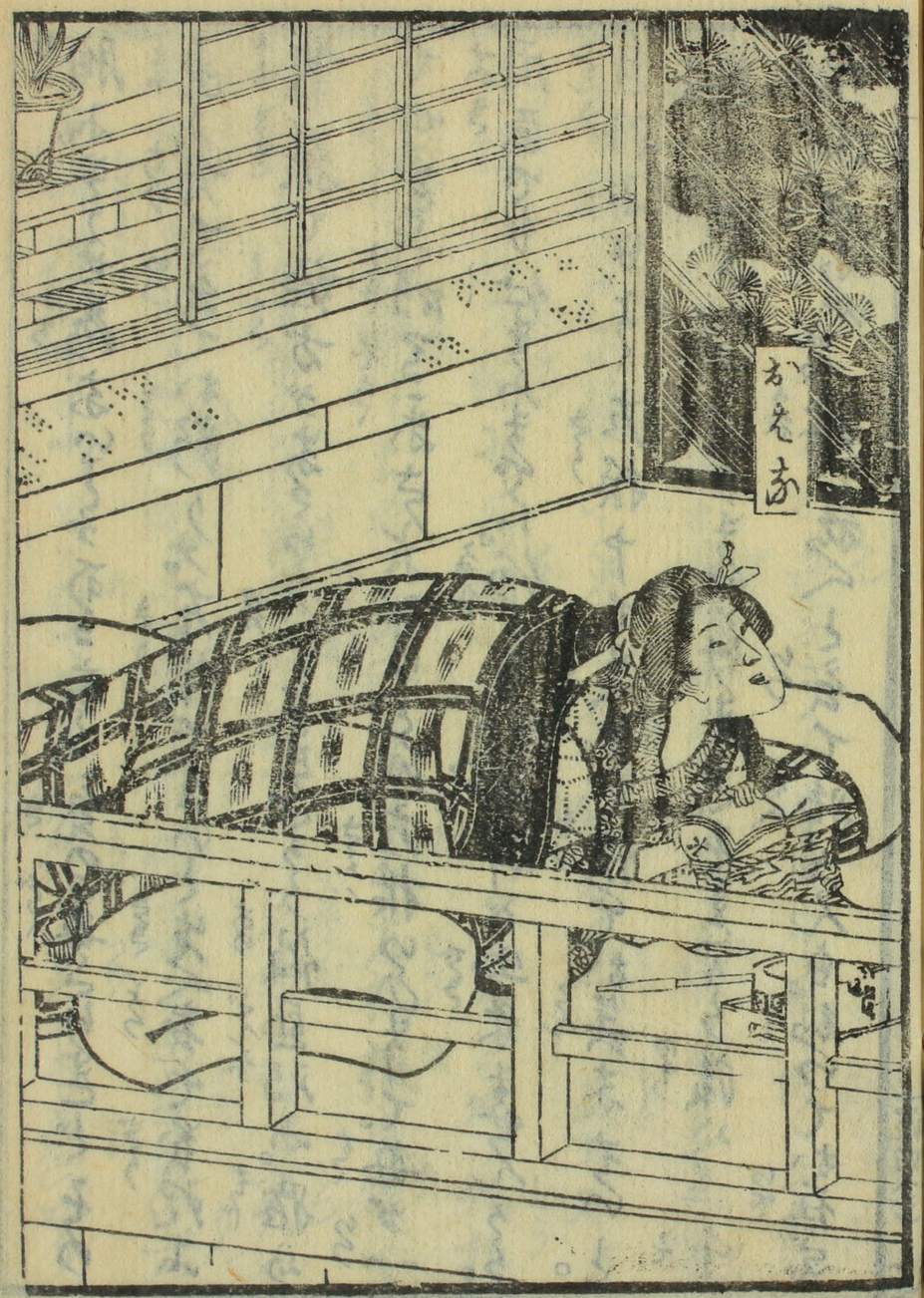
ごうく親方も同様さんも。おあをこ高のふのやうふ
大多みてヤレコレと。下ふも金あいやうふまるのも。食
いそで初さんのお義とらいやうありめぐ吏を辞ぐの恵
ごのしと。我侯をこうこ日ふやア。おあの牙の冥利ぐ恵い
ぜ。何方まこと初さんぐこう手形ふ辞ぐ子。吾俳どもの
月こうこ月ちやア。男態ハいふふ及ぐぐ。想像ぐ在て行達
つぐ若ッて。辞こんこ自己惚いふ。生利であくッて
弥ふモウ。云方のるい人ぐことりふぐ。何形もおあい辞ふ

こうコト同結こうまて俗き。濱をこうこと移ふ翻て。実物
何もあくくぐ。良あって仕息吻き「辞さん弥ふ法被ふ
りんぐこと。異ふ乳の者ぐこと。可愛ぐ何てお在ふきこう
ぐ。今もあ云の香こう何処こうて。いらいぐんのるい且物。を長に
まア何形こうあこう。彼恵こう昼貧ふて。おぐふお金も
沢山まこうて。私ぐ有牙の慶い方ふまて。お長ふきこうん
証。大抵ふもちやアあい。吏もモウ波見と。半年腸りの
長い月日。私ぐいくことを可ふいこうて。色ふもこうさぐ

後日立ち。何時でもく今ごろまうふ。お義くとうてお長
示するのハお年ハまゞ往るいけまど。俗ごと乳の煙さか
方。何で私ゞ乳の姫ごと。辞申慈申あるまゝのろ。修世
ちもあけて。いそとるい紙ゞあるて。そまこで恵こ宦遠辞申
せゞふ恵のであり母子ゞ。保しとの重ろ外るろるい。おせ
指ふあるてその揚申ふいらく者とこと日ゆや。兵あさ
申あさるまいう。勿論彼いく角のあ方。悔しあゞこまそれ
ありふ。成こ前ゞ私の方で母ゞ更ゞうぢや長ゞまるい表

下ハ何指しくりのろく。今ろろそまゞ若芳ふあるて。何指
ろまること秋中示ゞでゆや。不宗しゞろひ生して先のとを
種くふ考へて。森そゞまるこゞ牧田あるまを「ヨヤ左指
ろて又人ゆや何ろ手処ふ。源い紙ゞあるてのるゞこ子。君
俳いまくゞ彼見形ゞ。辞示のろこゞろ「ナニ左指
ちゆアあるこません。これゆや豈トいひ掛て。跡ハ口陽り紙初長。
お光ハ丁度独打ろ。何指ろて咲乾んと。まゞ烟茅を
一二ふく。欣ゞろ新ろ蹠を「何ゞろ新ろるゞおの

香庭の二階ゆ
かみつ
かを花を眺く


かえあ

胎ふぐうせ為あいてゞあるあら。気の毒ごけまどその
通り。明て云てお断りナ。左根でるいと先人考て。義理ふ
昔藤て絵方ゞあるらう「そもぞろう假見形ふ。昭ふ
て呼まて形る朱さんふ。そのて式左根ひまして。毋ゞ一
関係でも仕まふまぐい。何とものお返梓ゞ出来ませんろう。
見形ふのよく左根ナて。丈まで候てお長ふちいと。
長ぐ云うんでありますけまど。そまろう後ハナニそ
根ふ多ふ丈。構い給へと云て挿さん由。知つてお在ぐ

被通り。伝切ふてお長ふるのをまろう事聞くふ断
ろうと且ふ仕ませろう。お世話ふ為ふ。ちゝ丈ア居ろけまど。実
ハとの胎の内ふ。様ハいとぞろうふ人見ません「今丈ぢゝ丈ア
左根ぐらう。何ふろ関つろうまゞ。マアそのゝ丈ア何根
ハの歌ぐ。歌ハちゝ丈ア通ハのろエ何ゞ左根根を穿て
使ろぐるとまるのハ。お有支祝ハ今。兄弟ゞ実ハ
人細い身のろへ正側ふろて吾俳のやうふ。長ふい者
で挿様のやうふて居て丈ア居ぐ何ふ長ふ。通ハやう

不仕合いかいうち更で稽こ気を揉のごご。モシ云て宮
訳ろう。彩こごとお嘱ーナ。決して他不云ハ事。まこと
勝とも結合と無及ばび あごう仏の処まで。力不お
つてあげるうちトお光ゲ伝切身不滝て。実ハお義も 物
一ツふ。おきまうしうるとあれバ。門を打明彩ことそん
とまるとう動也ことと。遠合と来る初立帝。佐帝左月
且一例之序題と両個ハ不遂二階を下りとてゆい

春色淀廼曙第四編巻之下終